つてゐる。御堂關白記。こゝに於いて十一月十四日、道長は推問使を召問すべき由を行成に仰せ、行成は更に十六日之を大史忠國に命じてゐる。權記。更に十二月七日及び十三日には、推問使孝忠等の申文に就いて陣定を行つてゐるが、御堂關白記これで推問使に關することは、まづ形付いたものと思はる。（此項未完）

批評

カトリック研究の勃興

戸塚文卿譯カトリック思想史

坂口昂

フランス革命及ナポレオン戰役の後のヨーロッパに、ローマンチック燃え上つて中世の生活を愛慕し、その一面としてカトリック熱が一時旺盛となつた。この百年前の風潮に似通ふものが世界大戰の苦をなめつくした今日の世界に現はれてゐる。近時、東西文化の交換、隨て世界文化の弘通が盛んである、その内最も目につく一現象は世界の宗教文化に關する或る慾求の著しい勃興である。歐米、殊にドイツでは東洋、就中佛教に關する取扱が風を成してゐる。日本ではキリシタン物や南蠻ものが流行して來た。これを最近數年間の出版界に見るに、異國叢書（耶蘇會士日本通信上卷村

上直次郎譯)長崎叢書(耶蘇會年報第一卷村上直次部譯)、海表叢書(新村出監修)、吉利支丹遺物の研究(京都帝國大學文學部考古學研究報告第七冊)The Jesuit Mission Press in Japan 1591—1610 by Ernest Sato 飜刻、Bibliographie Japonaise rédigé par Pagés 1859 飜刻、切利支丹史料集(對外史料寶鑑第一輯)、切支丹宗門の迫害と潛伏(姉崎正治)、切支丹禁制の終末(同上)、正、續南蠻廣記(新村出)、吉利支丹文學抄(村岡典嗣)、切支丹鮮血遺書(松崎實)、切支丹殉敎記(同上、)、日本基督敎史上下(山本秀煌)、近世日本基督敎史(同上)、西敎史談(同上)、日本に於ける公敎會の復活(浦川和三郎)、切支丹宗門戰の研究(尾池義雄)等の如き、之を戰前に比して非常の盛況であつて、正さしく風潮の變化を象徵する。

こゝに問題とする著書は如上の運動の歷史的原動力を形作つてゐるカトリック思想に關するものである。

日本のカトリック敎會は維新以來復活し、殊に大戰以來帝國の利害が一層ローマの信仰と密接を加へ、法皇の特使の來朝もあり、また日本の信徒の間からその傳道及神學に向つて從來になき有力な人物を供給することゝなつた。而して出版に於ても近時日本カトリック刊行會が起り姉崎博士、山本海軍少將の監修の下にカトリック叢書を刊行し既にその三篇を公にしたが、最近に出たのが卽ち冒頭既揭のカトリック思想史である。

譯者は醫學士にして天主敎公會の司祭である。原著ヘースチングス、イエズス會神學校敎授ジョーゼフ・フービー編クリストゥス卽ち世界宗敎史(私は未だ見ないが Joseph Huby, Christus, manuel d'histoire des religions. Avec la collab. de Mgr. A. le Roy et de Mm. L. de Grandmaison, L. Wieger, J. Dahlmann, A. Carnoy, etc. らしい)の

中から、キリスト教に關する部分のみを譯出した。この部分は前記フーヒー、グランメーゾンの外に P. Rousselot, A. Blou を加へて四名の分擔にかゝる。全卷五篇に分る、(一)新約時代、(二)初代基督教、(三)中世紀基督教、(四)文藝復興時代よりフランス大革命までの基督教、(五)十九世及二十世紀初頭に於るカトリック教。宗教上人物の美術畫七葉を挿み、附錄に教會年表(譯者作成)、索引を添ふ、主要な脚註を存し譯し、術語にしば〳〵英語を割註し、人名に原語を加へ、率ね親切であつて、以て我國のすべてのキリスト教徒と一般知識階級とに訴へてゐる。はしがきに曰く「基督教は日本人にとつて新奇な物に過ぎなかつた」「我等は目前の急務の爲に近世以前に溯つて西洋史を讀む機會が無かつた」「凡て我等の有する西洋の知識(督教を含む)は近世に始まる。哲學にあれ、宗教にあれ、特に思想的方面の研究に於て其弊害(評者いふ缺陷か)は更に大きい。好むと好まざるとに拘らず、世界文明史に於て基督教の存在は儼然たる大事實である」と。私はこの譯者の慨言の、よしやそのまゝでないにしても、趣旨に於て大體これに同意したい、しかのみならず、翻て西洋史を專攻する人たちに於てすら同じ缺陷がないとはしないのを遺憾とする、これがために少くも中世史の中心文化事象が暗雲に過ごされるであらうから。

さて本論はローマ・カトリック教會を世界の聖公一教會として最も優秀な包容的人性的救濟母體と見なす一大確信の上に立つてゐるから、明かにこの教會のために護教的態度を持し、他のキリスト教、殊に近代以後は、強く自由プロテスタントに對抗してゐる。しかし決して盲目的狂信の風なく、最新開明なカトリック學風を發揮し、典據引證に富むも教理儀禮に偏せず、しば〳〵教會の主要人物を登場せしめてよくカトリックの思想や道

德の發展を敍してゐる。就中初代、中世及反敎會改革の諸篇は西洋史攻究者の好參考とするに足る。只だ一般讀者(日本の)のためには今少し多くの歷史の背景を配し置きたらんには、優に一種の文化史の用をなし得たらうにと思はれる。本書の學風の一端はローマンチックの遂に失望に終つたのを論ずるところに見られる。

しかし黃金時代は遂に來なかつた。待ち焦がれてゐたカトリック思想の復興も實現しなかつた。何故あのやらうに有望な播種が豐な收穫を齎らさなかつたのであらうか。……此美しい黎明が輝ける白日とならなかつた罪は、敎會側に於て、哲學及び神學の研究が淺薄皮相に止つたからである。……本當に有力な護敎學は堅固なる宗敎哲學に根底を有し、信仰の源泉に涵養された神學と組織的に充分に研究された歷史との智識を要するのである。三一〇頁

又本書の高調するカトリックの現在の位置抱負は最後の「現代(決論)」と題するところに窺はれる。既に一九一四年の世界大戰の數年以前から知識階級の中に、眞率なる考察、秩序、規律、傳統の精神が動いて來て、カトリック敎に對する理解、やがては改宗歸正の氣運が釀されるに至つた。戰爭はなほ此傾向を增して戰後の今日に於ては世界の眞の平和改造は基督敎を除外しては之を求められず、又社會の保障もカトリック敎以外に無いと考へる人が多くなつた。三六二頁

尙ほ文章の改善や誤植の訂正の若干望ましきはないではないが、大體、翻譯文としてかくの如きは、よく咀嚼されてゐて分りやすいといふべきであらう。

私は本書紹介に際して坐ろにカトリック研究の勃興を思ふ。而して前記出版圖書の概瞥表をみるに、大勢は思想よりも趣味信仰の方面が勝つてゐるやうである。これは固より研究の自由に屬す。しかし自分の願望としては、世界思潮の一大動力としてのかくの如き研究を層一層促進したい。また日本の學界に行はるゝ內外の文獻は、いづれの方面を問はず、新敎側から出たものが多くて舊敎側からのが少い。これらの理由の下に、私は學問の深化と公正のためにこの戶塚靈父の勞作を衷心より歡迎する。